

にっぽん文楽

飲みながら、食べながら文楽

日本を代表する古典芸能である「文楽」の存在を広く国内・外にアピールすることにより、その価値を再認識してもらおう——と、2014年、日本財団は「にっぽん文楽」プロジェクトを立ち上げた。約1億円をかけ、ヒノキ造りの本格的な組み立て舞台を制作。日本の伝統工法を駆使したもので、どこでも約1日で組み立て・解体が可能だ。

2015年3月19日～22日に開催された東京・六本木ヒルズのヒルズアリーナを皮切りに、2020年の東京オリンピックを一つのめどに、全国各地を公演して回る。各回限定300という客席は、幔幕（まんまく）で囲われただけの青天井に木の縁台が並び、飲食も可能。娯楽としての文楽の原点に立ち返り、開放的な空間で、ゆったりと寛ぎながら文楽を楽しんでもらおうという趣向。総合プロデューサーは、幅広い分野の古典芸能のプロデュースを手掛ける横浜能楽堂の中村雅之館長。

「人形浄瑠璃・文楽」は、大阪の町人文化の中で育まれた。古くは、「小屋掛け」と呼ばれる仮設の劇場で上演される庶民の娯楽だった。本プロジェクトは、長い年月をかけて獲得した文楽の高度な芸術性を崩すことなく、かつての開放的な空間性を再現することにより、娯楽としての文楽に立ち返ってみようというものだ。

東京公演は3月18日の招待公演を合わせて計8回公演。約2000人が集まった。演目は舞台披露にふさわしく祝儀物の「二人三番叟」と、道成寺物の名作「日高川入相花王 渡し場の段」。主な出演は、豊竹英大夫、竹澤團七、吉田玉女。



2015年度は秋に大阪での公演を予定。2016年度からは東京を中心に年に2回ずつ公演する予定だ。

にっぽん文楽プロジェクト ホームページ <http://www.nipponbunraku.com>